

虎説話にみる対外意識

― 中世初期を中心に ―

岡田美也子

今回のテーマは、今年の干支にちなんで「トラ」となっていますが、私の研究対象としている中世初期の説話の中にも動物の類がとて多く出てきます。説話には、例え話をとおして人々に何かを説き示すという性質がありますので、その動物をめぐる話は何を示そうとしているのかを探る楽しみがあるといえます。今回は、『宇治拾遺物語』と『今昔物語集』から「虎」が出てくる説話を取り上げまして、特にそこに見える対外国意識というものを見ていきたいと思います。

本講座でこれまでに三回の講演がありましたので、本題に入る前に、今日の話と重複する部分や関連する部分について、少し確認をしておきたいと思います。

まず、十二支の一つであるということ。今回のテーマは「干支を語る…寅」とありますが、十干十二支は、日本では年を表す時に使われるほか、日、時間、方角を表すものとしても用いられてきました。説話では、「寅」の方角や時刻が毘沙門天信仰とのかかわりで登場してきますので、後の方でそのことに触れたいと思います。

それから、講座第一回の時に、加藤清正の虎退治の話題がとりあげられたと思いますが、この話は、中世の日本人の虎に対する見方を代表す

るものといつてよいでしょう。この話題は、『常山紀談』という江戸時代の書物の中に「清正虎を狩られし事」という題で記されているほか、幕末から明治にかけてまとめられた人物列伝『名将言行録』などにも取り上げられています。今でも祭りの山車の意匠にも使われていたりして、非常によく知られたエピソードといえます。内容は、朝鮮出兵のおり、清正の小姓上月左膳が虎に噛み殺されてしまったことをきっかけに、清正がその虎を撃ち殺して敵を討ったという話で、武将の武勇譚となつていきます。はじめに結論的なことを申し上げる形になりますが、今日の前半でお話ししたいのは、『宇治拾遺物語』の虎説話は、この清正の虎退治が成立する前提となつていふことなのです。

それでは、『宇治拾遺』についてみていきましょう。この説話集には、虎説話が三つ、収められています。第三九話「虎の鰐取りたる事」、第一五五話「宗行が郎等、虎を射る事」、第一五六話「遣唐使の子、虎に食はるる事」で、後の二つは続けて配列されています。説話集には似た内容、あるいは対比される内容の説話が隣同士になつている場合が多くありまして、この三つの話についても、内容的には、三九話が異色で、一五五と一五六話は対になつていふと言えます。

では、まず第三九話「虎の鰐取りたる事」の本文を見ていきたいと思います。

九州の筑紫の商人が朝鮮半島の新羅に商いに行つた帰りの出来事です。長い航海のために、船に水を汲み入れようとしたときです。ふと気付くと水に山の影が映つていて、そこに虎が何かを狙っている様子が見えました。船に残っていた人たちは、これは大変と水を汲んでいた人を急いで呼び戻して、船を岸から離しました。虎は船に躍りかかろうとし

たが、船には届かず、海の中に落ちてしまいました。しばらく見ていると、虎が海から出てきたが、左の前足が膝から食いちぎられていた。どうも鰐鮫にやられてしまったようです。またしばらく見ていると、その切れたほうの足を水に浸して様子を伺っている。何をしているのかと思うと、鰐鮫が血の臭いに誘き出されてやってきた。すると、虎は残った右の前足で鰐鮫を陸に投げ入れて殺してしまつたと。その様子を見ていた商人たちは、あまりの恐ろしさに船を漕ぐ手も上の空になってしまつて、急いで帰国したという話になっています。

御存じのとおり、虎は日本には生息しておりませんでした。よつて、この話は、異国に行つて実際に恐ろしい虎を見た人々の体験談という意義があります。さらに、その主体が商人であるということは、貿易などのために朝鮮半島に渡つた人たちによって伝えられた話であらうということを示しています。

次に第一五五話「宗行が郎等、虎を射る事」に行きたいと思ひます。

主人公は「宗行の郎等」、すなわち壹岐守宗行という人の家来で、無名の人物です。宗行がささいなことでその家来を殺そうとしたので、彼が小舟に乗つて新羅の国に逃げていったところ、金海という町で人々が騒いでいます。何があつたのかと思つてみると、一頭の虎が何度も町にやつてきて人を喰つては逃げていくといひます。それを聞いた郎等は、自分は主人に殺されそうになつて逃げてきたのだから、どうせ死ぬならば、その虎と戦つて死にたいものだと考えます。虎がめつぼう強ければ相打ちになることもあるかもしれないが、自分ならただ喰われるだけでは終わらない、という自信を表明しています。注意をしていたきたいのが、「この国の人はつわもの道、わるきこそはあんめれ」という

発言です。「この国の人」すなわち新羅の人は武芸が劣つているのであらう、日本人である自分ならば必ず虎を退治することができる、というのです。新羅の人は、その日本人の自信満々の言葉を国守に報告しました。人喰ひ虎には人々も困つていますし、日本人がそんなことを言うならやらせてみようということになつて、郎等が召し出されました。どうしてそんなに簡単に殺せると言えるかと聞かれて、この男はこう答えます。

「この国の人は、我が身をば全くして敵をば害せんと思ひたれば、おぼろけにて、かやうのたけき獸などには、我が身の損ぜられぬべければ、まかりあはぬにこそ候ふめれ。日本の人は、いかにも我が身をばなきになしてまかりあへば、よき事も候ふめり。弓矢に携らん者、何しかは我が身を思はん事は候はん」

新羅の人々は、自分の身の安全を確保することを第一に考えながら虎を殺そうとするから、中途半端になるのだと。だから、こういう猛獸にはやられてしまふことがわかつているから立ち向かわないことさえないのではないかと。それに対して日本の人は捨て身で立ち向かうので、それが成功の要因となるのだと。武士ならば自分の身を惜しむことがあつてはならない、まず捨て身であることが重要であると主張しています。ならば虎を必ず退治してくれるかという問いに対して、自身の生死はどうなるかわからないが、必ず殺してみせましようと思つています。その後、郎等は、その虎の居場所と人を襲う時の様子を確認して退治に向かいます。周到に準備をして作戦を立てることと、捨て身である

ことは矛盾しないのです。一方、新羅の人たちは、「日本の人ははかなし、虎に喰われなん」、日本の人は浅はかだ、虎に喰われるにちがいない、と悪口を言いつつ結果を待っていました。

果たして、虎は、人々に教えられたとおりの場所、教えられたとおりに郎等を襲ってきました。虎が大口を開けて躍り上がってきた瞬間に郎等が弓矢を放ったところ、ちょうど顎のところに矢が刺さって、さらに後の二本も命中して虎を射抜きました。男は戻って事の首尾を国守に報告し、人々が見に行つたところ虎は見事に退治されました。そのときに人々が言ったこと。新羅の人々は、錐のような矢尻に毒を盛って射るので、虎は一発で死ななくてもいつかは毒が回って死ぬ、しかし、この日本人がしたように、その場で射殺してしまうことはとてもできない。

「日本の人は、我が命死なんをも露惜しまず、大きな矢にて射れば、その庭に射殺しつ。なほ兵の道は、日の本の人には当るべくもあらず。されば、いよいよいみじう恐ろしく覚ゆる国なり」とて怖ぢにけり。

先に日本人が主張していたように、日本人は自分の命が失われるのを少しも惜しまないので、弓矢一本で射殺してしまう。武芸の道で新羅の人は日本人に敵わない。日本はたいへん恐ろしい国であることよ、ここに至って二つの国の武の優劣に話が發展しています。郎等は、いわば日本人の代表として新羅の地でその武勇を披露した形になったわけです。

さて、こののをこのをば、なほ惜しみとどめていたはりけれど、妻子を恋ひて筑紫に帰りて、宗行がもとに行きて、その由を語りければ、「日本の面興したる者なり」とて、勘当も許してけり。多くの物ども、禄に得たりける、宗行にも取らず。多くの商人ども、新羅の人のいふを聞きて語りければ、筑紫にも、この国の人の兵はいみじき者にぞしけるとか。

さて、この男は、虎退治によりこの町に留められ大切に扱われたのですが、妻子を恋しく思つて筑紫に帰ってきました。宗行にもこのことを報告したところ、「日本の面興したる者なり」、つまり、日本の面目を果たした者だということに怒りを解いたということです。

話全体は、新羅の人々に比べ、武に秀でた日本人の話となっています。この話もやはり、最後の行に書いてありますが、商人が日本海を行き来しているときに聞いて伝えたものであることがわかります。この話は逆に、日本に伝えられて日本でも武士は素晴らしいものだともてはやしたと結ばれています。この話は、実は類話があるのですが、後でみていくことにします。

続けて一五六話「遣唐使の子、虎に食はるる事」を読んでききます。遣唐使として唐に渡つた人が主人公です。十歳ぐらいになる子供をとても可愛がっていたので唐にも連れて行つて一緒に暮らしていました。雪が高く降り積もつたある日、自分は外出もせずにはいましたが、子供が行つてしまつてなかなか帰つてきません。おかしいと思つて出てみると、雪の上に子供の足跡があつて、その後ろに大きな犬のような足跡がありました。その獣の足跡が見えたところから、子供の足跡が消えてい

たので、さては虎が子供をくわえてさらっていったのだからということ
で、この男は、刀を抜き、足跡を辿って山のほうへ入って行きました。
すると、やはり岩穴の入り口で虎が子供を喰い殺して腹を舐めて伏せて
いたのです。ところが、不思議なことにこの虎は、遣唐使が太刀を抜い
て近づいても逃げも恐れもせず、男がその頭を刀で打つと鯉の頭を割る
ように割れてしまいました。さらに、脇からやってきたもう一頭の虎の
背中を打つと、やはり背骨がぐにやぐにやになってしまいました。

唐の人は虎にあひて逃るぐ事だに難きに、かく虎をば打ち殺して、子
を取り返して来たれば、唐の人はいみじき事にいひて、「なほ日本の
国には兵の方はならびなき国なり」とめでけれど、子死にければ何に
かはせん。

唐土の人は虎に遭つたら逃げることさえ難しくて喰い殺されてしま
うのが当然のことなのに、日本の人は虎を殺して子供を取り返してきたの
で、日本人はたいしたものだと唐土の人は褒めはやしました。やはり日
本は武術に関しては比類ない国だと讃えたが、子供が死んでしまったの
でどうしようもないことである、と話が閉じられています。

この一五五話と一五六話はいずれも、日本人が新羅あるいは唐の国の
人々よりも武において優れているということを述べる内容になっていま
す。いずれも土地の人たちが褒めたということになっていますが、これ
らが説話として『宇治拾遺物語』に採録された背景には、日本人側の自
画自賛の意識が働いていると考えられます。

ところで、この一五五話と一五六話には、歴史的記録の中に類話を見

出せることが指摘されていますので、それをレジュームに戻って確認して
おきたいと思います。想像による作り話ではなく実際に事件があつて、
それが対外国意識を強化する形で説話として作りあげられていったとい
うことです。

まず、一五五話の類話ですが、これは『吾妻鏡』に載っている出来事
で、『宇治拾遺』の成立よりは若干早いものです。

参河守範頼、ならびに河内の五郎義長等、二品の命を受け、使者を高
麗国に渡すの間、対馬守親光かの島に帰着すと云々。これ去々年当島
より上洛せんと欲するの折節、平家鎮西に零落するの間、路次不通に
依つて纜を解くに能はず。なほもつて在国するのところ、中納言知盛
卿並びに少式種直等を奉行として、屋島に参ぜしむべきの由、その催
しに及ぶ。九州二島・中国等、皆平家の方に従ふといへども、親光独
り志を源家に運ぶの間行き向はず。よつて三ヶ度追討使を遣はさる。
いはゆる高二郎大夫経直（種直が家子）両度、拒押使宗房（種益が郎
等）一ヶ度なり。この輩しきりに下国し、あるいは国務を知行し、あ
るいは合戦に及ぶ。存命しがたきの間、風波を凌ぎ、去ぬる三月四日、
高麗国に越え渡らしむの時、妊婦を相伴ふ。よつて仮屋を曠野に構え
産生す。時に猛虎窺ひ来る。親光が郎従これを射取りをはんぬ。高麗
の国主この事を感じ、三ヶ国を親光に賜ふ。すでにかの国の臣たるの
ところ、この迎へありて帰朝す。件の国主殊にその余波を惜しみ、重
宝等を与へ、三艘の貢船に納めてこれを副へ送ると云々。

〔『吾妻鏡』元暦二年（一一八五）六月十四日〕原文は漢文

源平の合戦のころ、対馬守親光は平家に従わず、源氏方に通じていたということで追討の兵士を差し向けられて高麗に逃げていきました。そのときに連れていた妊婦が荒野に建てた小屋のなかで出産をしたのですが、おそらく出産時の血の臭いを嗅ぎつけたのでしょうか、虎が襲ってきたのです。親光がこれを見事退治したことを聞いて、高麗の国主が感心し、近光に三カ国を与えようとなりました。しかし、日本からの迎えがあったため、親光は高麗に留まることなく日本に帰ってきました。そこで、高句麗の国主は、国を与える代わりに宝を三艘の船に納めて親光に与え、日本に戻したそうです。

『宇治拾遺』の一五五話とは国や主人公が異なりますし、この記事では親光と郎等が虎を射殺した事になっていいるなどの違いもあります。ただ、ストーリーとして、異国に渡った日本人が虎という恐ろしい猛獣を退治して、そのことを土地の人が褒め称えたという構図になっていて、語りの背景に共通の意識が見られます。

もう一つの一五六話のほうですが、これについては、『日本書紀』にほぼ同じ話があって、原話という捉え方がなされています。西暦五四五年の出来事です。

冬十一月。膳臣巴提便還自百濟言。臣被遣使。妻子相逐去。行至百濟浜。(浜。海浜也。)日晚停宿。小兒忽亡、不知所之。其夜大雪。天曉始求、有虎連跡。臣乃帶刀攬甲。尋至巖岫。拔刀曰。敬受糸綸、劬勞陸海、櫛風沐雨、藉草班荊者。為愛其子、令紹父業也。惟汝威神。愛子一也。今夜兇亡。追蹤覓至。不畏亡命。欲報故來。既而其虎進前、開口欲噬。巴提便忽申左手。執其虎舌。右手刺殺。剥取皮還。

膳臣巴提便(はずひ)という人物が百濟に遣わされた時に、連れて行った子供が虎にさらわれて死んでしまいました。雪についた跡をたどって虎を見つけ、刀で退治したという話になっています。第一五六話と異なるのは、この出来事を現地の人々がどのようにとらえたかということについて、全く言及していない点です。そのことから、現地の人々の賛美の部分は『宇治拾遺』第一五六話が形成される段階で加わった部分ということが考えられるわけです。それから、興味深いのは、結末部分に虎の皮を剥いで戻って来たところとあることです。あとで触れますが、虎の皮は早くから貿易の品物や貢物として使われていたようでありまして、巴提便も虎の皮を一つの戦利品として持ち帰ったと考えられます。

このように『宇治拾遺』の中には三つしか虎の話がないのですが、そのうちの二つが明らかに外国の地における日本人の武勇譚になっています。その素材となった事実も存在するのですが、それらを種に日本人が大陸の人々よりもいかに武勇の点で優れているかということを主張する説話として成長していったと思われる。

ところで、この虎の話は江戸時代の人たちにも注目されていたようです。ある古書店のウェブサイトに「近世前期(寛文・延宝頃)写」という奈良絵本『宇治拾遺虎物語』が紹介されています(講演者注・本講演録作成時点では削除されている)。四つの説話とそれに対する五つの挿絵で構成されていて、一つ目の話は、龍虎の戦いというよくある話、後の三つはこれまで見てきた『宇治拾遺』の所収話のようです。残念ながら実物を見ておりませんので詳しいことは何とも言えませんが、こういった作品の成立自体が、早くから『宇治拾遺』の中の虎説話が注目されていたことの一つの証左になるかと思えます。それは、ただ虎の話が

面白いからというだけでなく、ここに日本人の武勇が語られているから
だといえるでしょう。

こういった話がつくられていく背景には、大きく分けて三つのことが
指摘されています。

一つは、先に申し上げたように、早くから虎の皮が貿易の商品として、
あるいは貢物として日本に入ってきていたということです。

『日本書紀』巻二九・天武天皇 朱鳥元年（六八六）四月十九日の記
事には、新羅からの貢物の中に「虎豹皮（とらなかつかみのかは）」が
見られます。また、『続日本紀』天平十一年（七三九）十二月十日や『日
本三代実録』貞観十四年（八七二）五月十八日には、渤海からの貢物の
中に「大虫七張」とあって、これは虎皮のことを指しています。『続日
本紀』や『日本三代実録』の記録の間に約二百年の開きがありますが、
その間、虎の皮が貢物として日本に入ってきて来たということが確認で
きます。もちろん、他にもたくさん資料があります。

五伊刀古（イトフルキ） 名兄乃君（ナアニノキミハ） 居居而（ヲリ
ヲリテ） 物尔伊行跡波（モノニイユクトハ） 韓国乃（カラクニノ）
虎云神乎（トラトイフカミヲ） 生取尔（イケドリニ） 八頭取持来
（ヤツトリモチキ） 其皮乎（ソノカハヲ） 多多弥尔刺（タタミニサ
シテ） 八重疊（ヤヘタタミ） 平群乃山尔（ヘグリノヤマニ） 四月
与（ウツキトヤ） …

（『万葉集』乞食者詠二首 三九〇七／三八八五）

『万葉集』の長歌で、「平群山」に掛かる長い序詞の部分に「韓国の虎

といふ神を生けどりに……その皮をたたみにさして」という表現が見え
ます。ここは虎が「神」として登場しているのが面白いのですが、生け
捕りにして皮を剥ぎ畳に敷いて、ということと、虎皮が武勇譚と財産獲
得の要素を伺わせるものとなっています。

さて、日本人による虎退治の武勇譚の背景の二点目として、中世の日
本において対外意識というものが非常に強くなってきていたということ
があげられます。虎をめぐる話にかかわらず、日本国と大陸の諸国と対
比して日本がより優れているという意識が、しばしば文献に見られま
す。配布資料に載せた日本古典文学全集『宇治拾遺物語』「遣唐使の子
虎に食はるる事」の頭注の後ろに簡単な説明がついているので、御覧く
ださい。『松浦宮物語』の中の日本の優越意識が引用されています。

他の文献も少しみてみましょう。配布資料に引用したのは、鴨長
明が編纂した説話集『菟心集』の跋文です。

彼の天竺は、南州の最中、まさしく仏の出で給へりし国なれど、像
法の末より、諸天の擁護やうやう衰へ、仏法滅し給へるがごとし。靈
鷲山のいにしへの事、虎・狼のすみかとなり、祇園精舎のふるき御は、
わづかに礎ばかりこそは、残りて侍るなれ。

しかるを、吾が国は、昔、いざなみ・いざなぎの尊より、百王の今
にいたるまで、久しく神の御国として、其の加護はなほあらたかなり。
あまさへ、新羅・高麗・支那・百済など云ひて、いきほひことのほか
なる国々さへ随へつつ、五濁乱慢のいやしきも、なほ大乗さかりに広
まり給へり。

（『菟心集』跋文 建保四年（一一二六）以前）

かのインドは、まさに仏がお出でになった国であるのだが、像法の末頃から仏法の守護神たちの力が衰えていって仏法が廃れてしまった。ここでは、仏法の衰えた証拠として釈迦の説法の聖地であった霊鷲山が虎や狼の住処になってしまった、と語っています。一方、日本は大昔から神の加護がある国であって、新羅・高麗・支那・百済といった勢いがさかんな国までも従えながら、さまざまな世の中の汚濁を超越して大乘の教えが広まっている、とあります。ここには、日本がこれらの国々よりも上の位置にあるという捉え方が見られます。厳密に言えば政治や武力の面ではなくて宗教的な意味からの優位性ですが、仏法が日本古来の神々によって守られているので広まっているのだという論理で、日本の優越性を述べています。

日本には古来、大陸から様々な文化が入ってきてきましたので、中世になって急に対外国意識が芽生えたというのではなくて、対外国への意識に変化が生じてきたということでしょう。奈良・平安時代は、さまざまな文化を諸国から学ぶことが多かったわけですが、その王朝貴族の時代が衰退するに従って、いろいろな価値観に変化が生じていきました。ちょうど仏教でいう末世が到来し、現実世界の混迷と重なったというところもありました。そこで、改めて日本を神の国とする思想が強まっていたわけですね。その神国思想は、はじめは貴族社会から生じたものですが、新しい時代の担い手である武士層の存在意義の軸の一つともなっています。武力によって政権を支え、国を守る武士たちにとってその武勇の支えになっていくわけです。さらには、武を軸とした対外国意識において日本の優越というものが浮かび上がってくるのだと思います。背景には、日本より進んでいる国から文化を受け入れてきたという

劣等感があってその裏返しだったのかもしれないませんが、平安の末期から中世にかけては、日本人が日本国というものを強く意識した時代でした。実は、和歌の世界にもそういった意識をうかがわせる文言がたびたび出てきます。今回は資料に例を載せませんでしたが、例えば、中国の漢文体に対して、和語で思想・感情を表現することの意義付けが神への信仰と結びついていって、和歌が神に護られた日本国の固有性を主張する根拠とされています。虎説話もその流れに位置づけられるかと思いません。

それから、一点目と二点目とも関わっていますが、三点目として、武士を中心として虎皮への憧れといったものが見られます。そういった点について、歴史学者の保立道久氏が次のように述べられています。

朝鮮に行く商人たちは虎皮がもつとも割のよい貿易商品になる理由が、虎皮の異国趣味的なフェティシズムになることはよく知っていたにちがいない。そしてそのような国際的商人に付する呪物性。フェティシズムは前近代的な他国観、異民族観を最大の地盤にしているものであり、商人たちがそのような観念にドップリとひたっていたのは当然のことである。私も、対外的経済交流の活発化が、即、善隣関係の進展ということにならないのは今も昔も変ることではないと思う。その意味で、虎皮に対するフェティシズムと「日本的武勇」の象徴としての「虎退治譚」が相互に結合して、そのポルテージを高めていくの

は一つの必然であった。

(保立道久「海 虎・鬼ヶ島と日本海海域史」
戸田芳美編『中世の生活空間』有斐閣 一九九三年八月、第六章)

日本に存在しなかった虎や虎皮は、それに対する憧れと、それを手に入れることによって得られる優越感を生んだと思われれます。保立氏は、「対外的経済交流の活発化が、即、善隣関係の進展ということにならぬ」とされていますが、地域間の交流がさかんになれば両者の関係の改善や緊密化につながるというのが一般的な捉え方ですが、一方で、経済的な交流は却って国家間地域間の摩擦や競争、さらには優劣意識を生み出す場合があるわけです。付き合うことで対異国意識というものがむしろ強くなっていく。そうしたなかで、虎皮に神秘的な価値が付加されていって、それを獲得することと純粋な武勇の象徴としての虎退治が結び合って、虎の棲む国の征服といった方向性をも生み出していったといえます。加藤清正の虎退治の話は、まさにそうした流れの中に出てくるのであって、いわゆる朝鮮征伐ということと、虎退治の話というのは二重になっているわけですね。単に虎を退治したというよりも異国に対して日本の武の優越性というものを見せつける、そういった意味がある話として、『宇治拾遺』の一五五話などはその前提になるものといっていると思います。

さて、次は『宇治拾遺』の比較の対象として、約百年前に成立した説話集『今昔物語集』の虎説話について簡単に見ておきたいと思えます。先ほどみたとおり、平安末期から中世にかけての資料には国家意識がうかがえるものがあるが、『宇治拾遺』の虎説話もその一環としてとらえることができます。遡って『今昔物語集』ではどうであったかということを探ってみたいと思えます。

『今昔』は、仏教伝来の道筋である天竺、震旦、本朝、すなわちインド、中国、日本の三つの地域の話を集めたもので、それぞれに仏法部と世俗

部に分かれています。興味深いことに、この三つの地域の中に含まれている虎説話がそれぞれ違う観点で語られているように思われます。

まず、巻一に収められている説話で、ある翁の出家をめぐる話です。

佛ヶ説テ宣ハク、「汝、善ク聴ケ、此翁ハ過去ノ八万劫ノ土地ヲ塵ト成シテ一劫ニ充テ、其ノ数ヨリモ前二人ト生レテ獵師ト有キ。鹿ヲ射ト思テ待チ立リシ間、俄ニ虎来テ喰ムト為シ時、獵師、虎ノ難ヲ免カレムガ為メニ只一度『南无佛』ト申シキ。其ノ獵師ト云ハ此翁也。然レバ其ノ善根不朽スシテ于今有リ。此ニ依テ出家ヲ許ス也。汝ハ其レヲ不知ズシテ出家ヲ不許サル也」ト。

（『今昔』巻一 翁、詣佛所出家語第廿七）

この翁には出家をして仏道に入ることのできるような種が無いのではないかと問われたのに対して、仏が答えた言葉です。この翁は、もともと獵師だったのですが、あるとき鹿を待ち構えていて自身が虎に襲われそうになりました。そのときその難を逃れるために、たった一度「南無仏」と唱えたのです。それが善根となって朽ちずに今まで存在している、だからこの翁に出家を許す理由があるのだ、と説明しています。つまり、この説話では、虎そのものは重要な役目を果たすわけではありませんが、仏道への機縁を作った存在となっています。

次に挙げた巻二、四に収められた説話は、釈迦の前生を語る話、前生譚としてたいへんよく知られている「捨身飼虎」の語りを引用したものと なっています（引用中の■は欠字）。

今昔、天竺二一ノ國有り、一ノ山有り。其ノ山二一ノ狐住ム、亦一ノ虎住ム。此ノ狐、彼ノ虎ノ威ヲ借テ諸ノ獸ヲ恐シケリ。虎、此ノ事ヲ聞テ狐ノ所ニ行テ責テ云ク、「汝チ何ゾ威ヲ借テ諸ノ獸ヲ恐セルゾ」ト。狐、天地ノ神ヲ懸テ諍フト云ヘドモ、虎、更ニ不信ズ。狐術无クテ逃テ去ナムト

思テ、走り逃ル程ニ、不意ニ穴井ノ有ケルニ落入ヌ。其ノ井深クシテ可登キ様无クテ、井ノ底ニ臥フシ乍ラ、世間ノ无常ヲ觀ジテ一念ノ菩提心ヲ■ス、「昔ノ薩埵王子ハ虎ニ身ヲ施シテ菩提心ヲ■セリ。我レ、今亦、如然キ也」ト。

其ノ時ニ大地ニ六種ニ震動ス、六欲天皆動ズ。此ニ依テ文殊・天帝尺、共ニ仙人ノ形ト成テ、穴井ノ許ニ至給テ狐ニ問テ云ク、「汝チ何ナル心ヲ■コシ、何ナル願ヲ成セルゾ」ト。狐、荅テ云ク、「若シ我ガ思フ所ノ事ヲ知ラムト思ハ、先ズ我ヲ引上ゲヨ。其後ニ可云シ」ト云フ時ニ、云フニ随テ引上ゲツ。

其ノ後、「早ク云ヘ」ト責ルニ、狐登ニケレバ菩提心ヲ忽ニ忘テ、「不云ズシテ逃ナム」ト思フ心付ヌ。其ノ心ヲ見テ、仙人、忽ニ降魔ノ相ニ成テ鉞・鉞ヲ以テ責ルニ、狐、上件ノ事ヲ語ル。仙人、此ノ事ヲ聞テ慈悲ノ心ヲ■シテ狐ヲ讚テ云ク、「汝チ、一念ノ菩提心ヲ■セルニ依テ命終シテ後、釈迦佛ノ御世ニ菩薩ト成テ二ノ名ヲ可得シ。一ハ大弁才天ト云ヒ、二ハ堅■地神ト可云シ。八万四千ノ鬼神ヲ仕率トシテ一切衆生ニ福ヲ授クベシ」ト云テ、搔消ツ様ニ失ヌ。

其ノ時ノ仙人ト云ハ、今ノ文殊、此レ也。其ノ時ノ狐ト云ハ、今ノ堅■地神、此レ也。此ノ菩薩ハ身ノ長ハ千丈也。八ノ手有り、二ハ合掌シタリ、六ハ鑑・鋤・鎌・等ヲ取テ、一切衆生ニ五穀ヲ令造テ福ヲ

与フル也。九億四千ノ鬼神ヲ仕ヘリ。然レバ、一念ノ菩提心、不可思議也。世間ニ「狐ハ虎ノ威ヲ借」ト云フ事ハ此レヲ云フトゾ語り傳ヘタルトヤ。

〔今昔〕卷二 天竺狐、借虎威被責■菩提心語第廿一

「佛ノ世ニ出テ菩薩ノ道ヲ行給ヒシ事ハ、我等衆生ヲ利益拔濟シ給ハムガ為也。傳ヘ聞ケバ、人ヲ濟ヒ給フ道ニハ身ヲモ■ヲモ不貧ズ、命ヲモ捨給フ。所謂一ノ羽ノ鴿ニ身ヲ捨テ、七ツノ虎ニ命ヲ亡ボシ眼ヲ扶テ婆羅門ニ施シ、血ヲ出シテ婆羅門ニ飲シメ、如此ク有難キ事ヲシテ施シ給フ。……」ト

〔今昔〕卷四 天竺佛、為盜人■被取眉間玉語第十七

面白いのは卷二の天竺の狐の話です。「虎の威を借る狐」がいて周囲の獣たちに恐れられていました。そのことを虎から責め立てられた狐は、逃げ去る途中で空井戸に落ちてしまつて登ることもできずに底に臥している時に、世の無常を感じて仏道を目指す心を起こします。その狐の菩提心を感じした文殊菩薩や帝釈天が穴のところにやってきて「どういう心でその願いを果たそうとするのか」と聞いたところ、狐は「自分が思うところを知りたいのならば、穴から引上げてください。そうしたら話します」と言いました。狐のずる賢いイメージが説話でも描かれていますね。引き上げられたあとに「早く言え」と責められたのですが、身が安全になったとたんに菩提心を忘れてそのまま逃げてしまおうとしました。しかし、相手は文殊や帝釈天ですからさらに強く責め立てられた拳句、観念してその心を語りました。そのことによって狐は、生まれ

変わって二つの名前、ひとつは大弁才天、もうひとつは堅牢地神つまり大地の神の名を得るだろう、と約束されたのです。「虎の威を借る狐」という慣用語のもととなった話を踏まえつつ、虎の脅威は、それを利用して狐が仏道に入るきっかけとして位置づけられています。虎そのものが仏教の遣いといったことではなく、虎に襲われたことがきっかけとなっているというのが、巻一と共通しているところです。

狐は、空井戸に落ちた際に「薩埵王子は虎に身を捧げて菩提心を起こされたが、今の自分は同じようなものだ」と捨身飼虎の説話を思い出しています。狐の落ちたところに虎はいませんが、比喩的に想起しているわけです。改めてその捨身飼虎の話を覚えておきます。

有一虎。適産七日而有七子。圍繞周匝飢餓窮悴。身體羸瘦命將欲絶。：(中略)：我今爲利諸衆生故。證於最勝無上道故。大悲不動捨難捨故。爲求菩提智所讚故。欲度三有諸衆生故。欲滅生死怖畏熱惱故。是時王子作是誓已。即自放身臥餓虎前。：(中略)：虎今羸瘦身無勢力。不能得我身血肉食。：(中略)：即以乾竹刺頸出血。於高山上投身虎前。〔『金光明經』卷四・捨身品第一七〕

釈迦が、三人兄弟の末っ子摩訶薩埵王子として生きていたときのことです。あるとき兄弟三人で竹林の中を歩いていると、虎が横たわっていました。七匹の子どもを出産してから七日が経っていたのですが、衰弱しきって今にも死にそうになっている。このまま飢えたら産んだばかりの子どもを食べてしまいかねないという状況でした。上の二人の王子は、心苦しいが仕方がないことといってそこを立ち去るのですが、三

番目の摩訶薩埵王子は今こそ自分の身を捨てるときが来たといって、虎の前に自分の身を横たえて食べさせようとします。しかし、虎は痩せ衰えてしまつて力もないので、王子を食べることもできない。そこで、王子は自分を竹で刺して血を出し、そして高い山から虎の前に身を投げて我が身を食べさせたという話になっています。

この「捨身飼虎」が菩薩行を語るものですが、それをふまえる説話でも虎は、発心や菩薩行のきっかけとなる存在になっていて、仏教の教えの中に虎が重要な役割を持っているといえます。それが『今昔』天竺の部の虎の姿になっています。いいかえれば、『今昔』の中では、天竺は仏教の発祥の地という意味が非常に強く、その地にいる虎は仏教と深い関わりを持っている存在であるということになるでしょう。

やや横道にそれますが、『閑居友』という説話集の中に、日本から唐インドへと渡つた真如法親王が最後、虎に遭遇して命を落とすとされている話があります。

渡り給ひける道の用意に、大柑子お三つ持ち給ひたりけるを、飢れたる姿したる人出で来て、乞ひければ、取り出て、中にも小さきを与へ給へり。この人、「同じくは、大きなるをは与らばや」といひければ、「我は、これにて末かぎらぬ道お行くべし。汝は、こゝのものの人也。さしあたりたる飢おふせきては、足りぬべし」とありければ、この人、菩薩の行は、さる事なし。汝、心小さし、心小さき人の施す物おは受くべからず」とて、かき消ち失せにけり。親王、あやしめて、「化人の出来て、我が心をはかり給ひけるにこそ」と、悔しく、あぢきなし。さて、やうやう進み行くほどに、ついに虎に行き遇ひて、むなしく

命終りぬとなん。

〔閑居友〕上・一 真如親王、天竺に渡り給ふ事

唐に渡った真如法親王が、あるとき飢えた人に会います。持っていた

三つのみかんをくださいと言われて小さいのをあげたところ、乞食がど

うせなら大きいほうをくれればいいのと言いました。真如法親王は

「あなたは土地の人だから当面の飢えを凌げばいいでしょう。私はいつ

終わるかもわからない旅に出ているので、大きいのはあげられない」と

断ってしまいます。すると、この人は、菩薩の業というのはそのような

ものでないだろう、心の小さい人の物はもうべきではない、と言っ

てふっとかき消えてしまった。そこで親王は、これは仏の遣いが自身の

心を試そうとしたのだと気づいて後悔するのですが、どうしようもな

かった。そして、さらにインドを目指して進んでいく途中、虎に喰われ

て死んでしまったという話です。

この話も施しを惜しんだために虎に喰われて死んだ、と読むならば、

虎は、人の利他の心や菩提心を試したり裁いたりできる存在ということ

になるでしょう。

この二つ目の地域である震旦には、五つの虎の話があります。

卷七 震旦會稽山弘明、轉讀法花經縛鬼語第十七

—法華經の功德を受ける虎

震旦韋仲珪、讀誦法花經現瑞相語第廿七

—法華經の功德を受ける虎

卷九 會稽洲楊威、入山遁虎難語第五

—孝子譚 孝行の心に感ずる虎

歐尚、戀死父墓造菴居住語第八

—孝子譚

卷十 李廣箭、射立似母巖語第十七

—孝子譚 岩を、母を殺した虎と勘違い

卷七の二つは、主人公が『法華經』を誦むのを聞いた虎に、後日なん

らかの形で功德が現れるという話になっています。同じく仏教の話では

あるのですが、震旦の部ではそれぞれの人物の発心のきっかけを与える

部分ではなくて、功德を受ける側に位置づけられています。

それから特徴的なのは卷九の第五話と第八話、卷十の第一七話で、こ

れらはいわゆる孝子譚、親孝行の人の話になっています。卷九の第五

話、楊威の孝行譚は他の書物にも取り上げられています。虎に襲われ

たときに孝行の気持ちから出た涙に虎が感じて襲うことをやめるとい

話です。また、卷十の第一七話では、主人公は虎に殺されてしまった母

親の敵をうつために出かけます。そして、その虎を見つけて矢でしとめ

たと思ったのですが、矢が刺さっていたのは岩であったのです。そこで、

もう一度岩に矢を刺そうとしたが、刺さらない。最初は、親を思う心が

あったからこそ岩をも射とおすことができた、というのです。

三番目に本朝です。実は日本の話の中で虎の存在が何らかの意味を持

つものは、卷二九の第三一話「鎮西人、渡新羅値虎語」一話しかありま

せん。これは『宇治拾遺』一五六話と同話です。分類というならば世俗

譚ですね。

このように見ていきますと、『今昔』、『宇治拾遺』は、平安末期から

中世にかけての二大説話集ということで同類話も非常に多く含まれてい

るのですが、虎説話に関しては大きな違いがあるといえます。『宇治拾

「遺」の目的は、日本の、特に武の顕彰ですね。一方の『今昔』は、天竺は仏法にまつわる話、震旦は孝行譚など儒教国らしい性質の話というように、各々の信仰上の特徴を伝えてくれると思われれます。すなわち、『今昔』、『宇治拾遺』の虎説話は、それぞれの説話集における世界観、国とらえかたそのものに関わっていると言えます。

さて、最初に予告をしましたので、毘沙門天信仰と虎とのかかわりについて簡単に触れて終わりにしたいと思います。

おそらくみなさん御存じかと思いますが、方角を十二支で示したときに丑寅の方向は鬼門にあたります。そのことは、鬼の姿が牛の角と虎皮の褌で表現されることの要因になっているとされています。例えば、鞍馬寺は都の鬼門に存在していて、そこから魔が入らないように都を守っているのですが、その鞍馬寺の縁起では、毘沙門天が寅の年、寅の月、寅の刻に現われたとあります。そもそも「寅(イン)」という字は順序を表す語の一つで、動物の「虎」とは無関係のものですが、それに動物の虎が割り当てられて日本でも定着しました。今も鞍馬寺では境内のあちこちに寅が飾られていて、毘沙門天信仰と虎の結びつきを表しています。毘沙門天は、仏法を守る神ですが、日本古来の神スサノオを媒介としてインドや韓国に由来が求められる牛頭天王と習合した部分もありますので、異国趣味と虎とのかかわりということがここにも伺えるかと思えます。

以上、中世初期の説話における虎を見てまいりました。虎に対する意識の形成において、日本にいないということ、たいへん獰猛な獣であるということが大きな要素となっています。そして、平安末期から中世にかけての国家意識の浮揚とともに、日本の武勇を語る話の中で虎が大陸

の象徴として機能することになったといえます。逆に、日本は、外国の文化においてどのような動物でイメージされていたのでしょうか。機会があれば考えてみたいと思います。御清聴ありがとうございました。

(おかだ みやこ・本学国際人文学部准教授)